

【中世部門】

0804 教室 ー 一時一五分開始

『蒙求和歌』 「女媧補天」考

—— 王権と仏法の二重位相

胡 俊

「女媧補天」という話は、『蒙求和歌』管絃部の冒頭に配されている。本来、この話は音楽と直接的な関係を持たないが、源光行は増補を通じて音楽的要素を付加するとともに、女媧の女帝および菩薩としての身分を書き加え、管絃をめぐる王権と仏法という二重の位相を強調した。この意識は和歌にも顕著に現れている。とりわけ、「トダエモミエズ」という当時の歌壇において新奇性を帯びた表現は、「雪」のイメージに加え、「久米の岩橋」をも喚起し、女媧の琴奏によって生じた異様な現象と、一言主神による架橋のイメージとを重層させることで、管絃が天地をも動かさしうる偉力を

有することを示している。このような王権と仏法の双方にまたがる妙用は、『十訓抄』や『古今著聞集』といった同時代の説話集にも見出され、当時盛行していた「管絃の徳」という観念を強く意識している可能性が高い。

(清華大学大学院)

「宗源」考

—— 吉田兼俱の『日本書紀』講釈と

『宗鏡録』——

小田島 良

室町後期の神道家・吉田兼俱は、独自の神道説である吉田神道を大成したが、彼自身は自家の神道説を「元本宗源神道」あるいは「宗源神道」と称した。また、近世の吉田家は全国の神社に位階や神号を授ける「宗源宣旨」を発行し、神社界を序列化したことで知られる。このように「宗源」は吉田神

道を象徴する語として注目されるが、そもそも「宗源」がいかなる意味をもつ概念なのかについて、従来ほとんど検討されてこなかった。「宗源」は『日本書紀』神代上・第九段一書第二で、兼俱が吉田家の祖と主張した「天児屋命」が「神事を主(つかさど)る宗源者」と称されたことに由来する。『日本書紀』にはこれ以上の説明のない「宗源」という語を、兼俱はいかに解釈し、いかなる意味を与えたのか、兼俱の『日本書紀』講釈の聞書を中心に、その内実を明らかにする。

(東京大学特任研究員

(日本学術振興会特別研究員))

『酒吞童子絵巻』の絵における頼光の配置の変遷について

—— 絵から諸本の変遷を読み解く——

木村 早希

本発表は、室町物語における『酒吞童子絵巻』について、絵を中心に考察を行うことによつて、『酒吞童子絵巻』諸本の展開の一端を明らかにすることを目的とする。詞書・絵双方を確認できる諸本一二本のうち、源頼光の配置に違いの見られる九本・一〇場面に注目し、整理・分析を行った結果、頼光を中心に一行が取り巻くように描く狩野家系伝本群と、頼光を前に出して一行の先頭に描く伝本群に二分されることが明らかとなった。狩野家系の諸本は、『土蜘蛛草紙』における頼光と綱の配置や『藍染川絵巻』、洛中洛外図などに見られる武士団の描写からも明らかのように、武家としての行動規範に則つて頼光一行を描いていると考えられる。一方で、江戸時代、合戦のない平和な時代にあつて、物語を領導していく棟梁の言動に呼应し、武家としての行動規範には基づかず、武士団の先頭に押し出して描き出す、あら

たな諸本群が生み出されていったと考えられる。

(信州大学大学院)

『うたたね草紙』における入水と救済——「こん世の海女」の引歌と逆縁をめぐつて

藤本 茉穂

『うたたね草紙』において、女君は「こん世の海女ともなりなば、中々絶えぬ逢瀬にもやめぐり合はまし」と入水を決意し、男君の舟に救われて結ばれる。先行研究では本作品を恋愛譚として論じ、入水の動機や救済の構造は十分に検討されていない。本発表では、まず「こん世の海女」の典拠である古今和歌六帖の歌を起点に、関連する歌群(金葉集・山家集・玉吟集等)を検討する。和歌の伝統において「来世の海女」は修辭的・仮定的表現に留

まるのに対し、本作品では意志形「かづかん」が女君の入水行為として実行に移される。次に『狭衣物語』の飛鳥井女君の入水(未遂)との比較を通じて、本作品の入水が絶望ではなく「後の世の契」への確信に基づく積極的選択であることを示す。さらに、この入水が石山観音の方便によつて現世の婚姻に転じる逆縁の構造を論じ、観音靈驗譚としての本作品の意義を明らかにしたい。

(神戸大学大学院)

絵巻『はちの木』攷

——〈歴史〉との接続、奈良絵本・絵巻の方法の一つとして——

大橋 直義

北条時頼廻国伝説を素材とした能に『鉢木』がある。本報告で主たる検討対象に据える大東急記念文庫蔵『はち

の木』絵巻三卷三軸は、その巻下において、表現の面にいたるまで《鉢木》と重なり、謡曲テキストを絵巻化したものとして知られている。同書の翻刻および影印・解題が刊行された後、聖徳大学蔵『鉢木』絵巻二軸（巻中を欠く）が紹介されたが、絵巻『はちの木』についての関心はこの点に終始しており、巻上・中についての言及はこれまでなされてこなかった。本報告においては、この両巻における野木宮合戦および宝治合戦の叙述に着目し、

《鉢木》を絵巻化する際、平安最末から鎌倉中期までの東国の〈歴史〉に接続させるかたちで物語を長大化・複雑化させた様相を具体的に読む。殊に野木宮合戦は、『吾妻鏡』においてもその叙述に矛盾を生じさせているものであり、近年の『吾妻鏡』についての理解の拡がりや中世末期の物語から再検証することにも繋がる。

(実践女子大学)